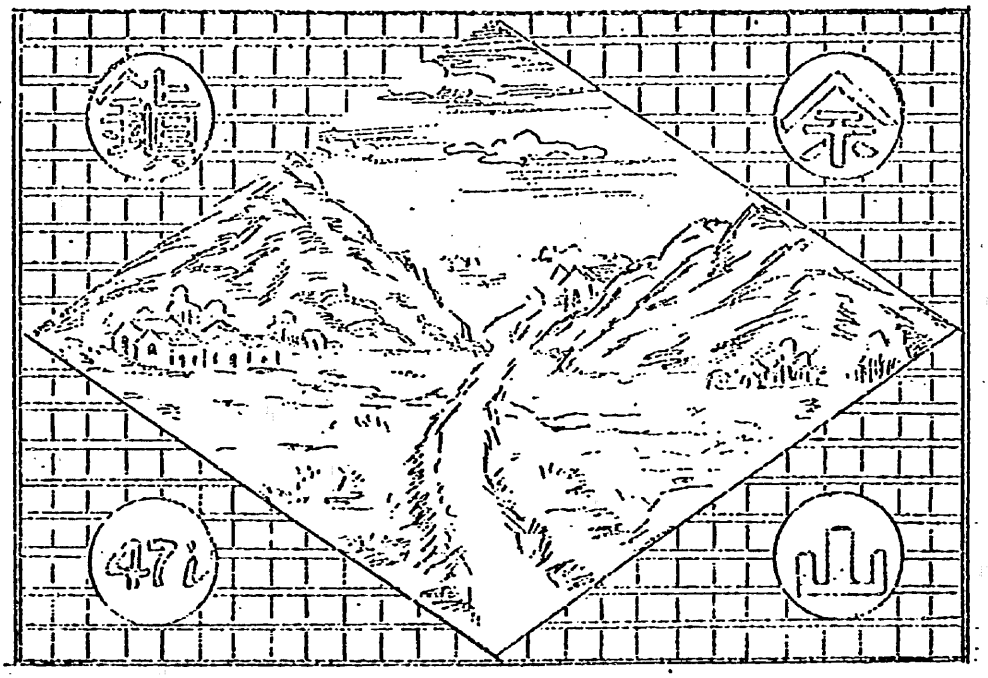
小四227



余山鎮附近の戰鬪

歩兵第四十七聯隊　第三中隊

十一月五日　杭州湾に上陸し　途中金山・新閘河附近の優勢な敵を殲滅し　十一月八日　第一の任務であつた滬杭鉄路の遮断は見事に成功しました。

その日情報により　上海及其以南の敵は青浦方面に退却中なるを知り　師団は九日張家橋を攻撃前進中　目標を変更して青浦に向ひ敵の退路遮断に決し　大橋斗に一時集結して　一四〇〇同地を出発しました

中隊は　前衛主力の後尾を先づ大橋斗―余山鎮―青浦道を青浦に向つて前進中　一八〇〇余山

0238

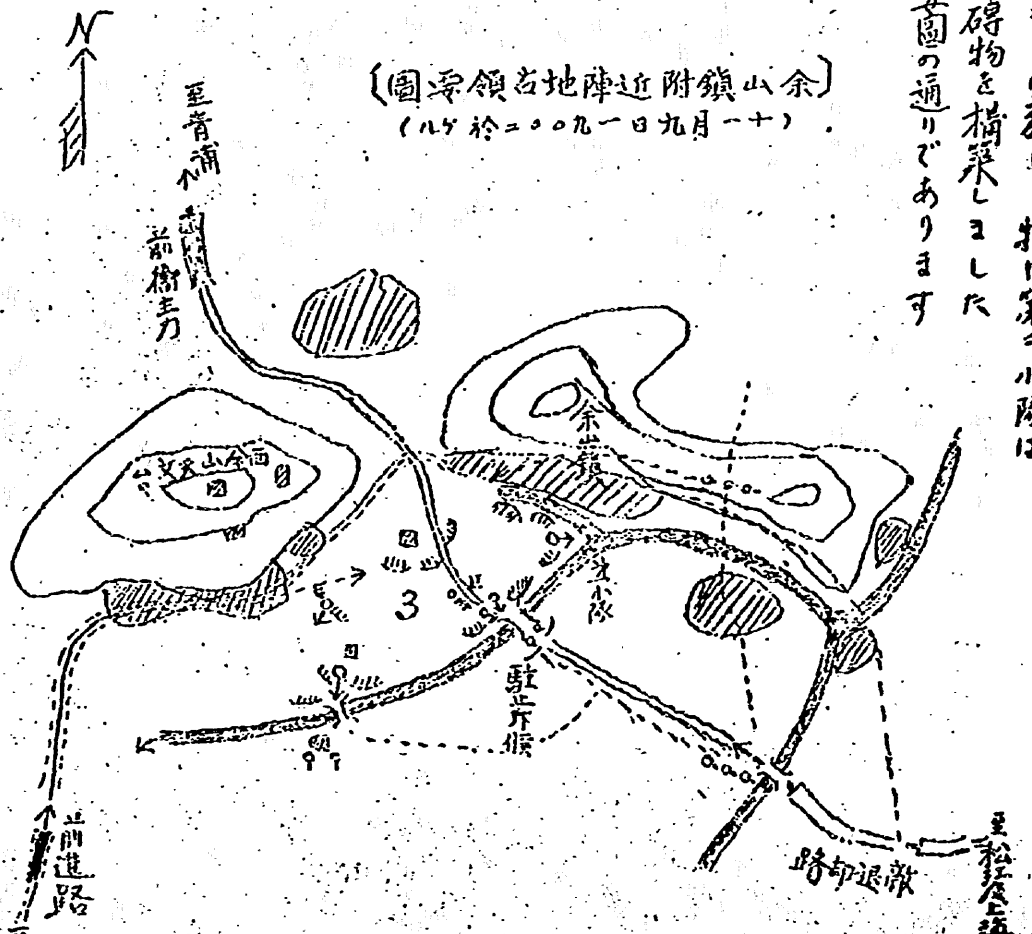
国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

鎮の軍用道路に達しました
敵は本道路を利用して　上海及松江より青
浦に向か退却中です　前衛の先頭を前進中
であつた第十中隊は　前衛部隊の通過援護
の為　本道路上に位置して居りましたが
已に敵二十名をその時捕獲して居るやうな
状況でありました
此處で中隊は　本道上に於て旅団司令部の
到着まで援護すべし　といふ命をうけまし
たので直ちに配置をなし　クリークを利用
して此の地を固守し　退却し來る敵を殲滅
することに決し　中隊長は左記命令を下達
して　その配備を急がしめました
一　松江方向及其以北ノ敵ハ逐次我軍ノ攻
撃ニ壓迫サレ本道上ヲ退却中ナリ
二　中隊ハ第十中隊ト本道守備ヲ交代シ旅
團司令部ノ現在地到着マデ此地ヲ固守
シ主力ノ前進ヲ掩護セントス
三　第一小隊(三分隊欠)ハ橋梁ヲ含ミ左山脚
迄ノ間ニ　第二小隊ハ全力ヲ以テ本道
上橋梁ニ　第三小隊ハ右前方小橋附近
ニ在リテ退却スル敵ニ對シ其地ヲ固守
スベシ
第一・第三小隊ノ擲彈筒ハ中隊指揮班ニ
位置スベシ
如何ナル攻撃ヲ受クルモ其地ヲ死守シ
又或ルベク敵ヲ誘致スベシ
四　工事ハ膝射　ナシ得レバ立射トシ別命
アルマデ自動火器ノ外射撃ヲ禁ス
五　第一小隊ノ残余ハ予備隊トス　暫ク橋
梁附近ニ位置シ　刺殺ニ任シ夜ニ入リ
一軒家ニ位置スベシ
六　合言葉ハ加藤清正トス
七　余ハ暫ク第二小隊ノ位置ニ　後一軒屋
ニ至ル
右命令に基き　各小隊は即刻任地に就き夫

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

[illegible]工事を実施し　特に第二小隊は
橋梁上に自動車障碍物を構築しました
當時中隊の態勢要圖の通りであります
更に陣地を増強中
前方の斥候より
「敵約三百　本
道上を退却し
来る　尚後続
部隊を有する
が如し」
との報告があり
同時に第三小隊
よりも
「前方に自動車
の騒音を聞く」
との報告に接し
ました
丁度このとき
旅団司令部も到

〔余山鎮附近陣地占領要圖〕
（十一月九日一九〇二年）



着しましたので
中隊長は早速こ
の状況を報告し
ました
これまでに敵の
数組の斥候が浸
入しましたが
それは悉く捕獲
しました
間もなく二十余り
の喇叭を吹奏して
小笛を吹き　一斉
に射撃を開始する
と共に　本道上を
猛然たる勢で突撃
して参ります
時に一九三〇です

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

中隊は敵を至近距離に引寄せて壊滅すべく
近接し来るのを待ち　陣地前五〇米に進つ
た時LG小銃共一斉に猛射を浴せますと　敵
は路上に折重つて殪れる　然し彼方からは
之を踏み越へ〈〉どん〈〉肉迫して来る
それを橋梁に頑張る者は射つて射つて射ち
まくる……全く必死の奮斗です
敵は益々数を増し新手々々と潮の如く押寄
せて来る　此処を先進と快音心地よく火を
吐いたLGがハタと鳴りを鎮めた　火熱の爲
の故障です
故障排除の数刻のもどかしさ――
「神よ護れ」の　一念です
やがて再び火矢は飛ぶ　然し第一線の所は
既に弾薬を射ち盡し　小銃撃を補充して應
戦しましたが　之とて間もなく射盡して一
時中止の止むなき状態になりました
敵は得たりや應と　猛烈な射撃と共に橋梁

奪取の突撃を敢行して来ます　橋梁上は忽
ち彼我入り乱れて物凄い白兵戦が展開され
一大修羅場と化しました
中隊長は此の時　第二小隊の橋梁保持困難
なると判断し　第二小隊の第六分隊並に第
一小隊第五分隊を急援増加せしめ　尚控へ
置きました擲弾筒に本道上の射撃を命じ
愈々橋梁確保の強化を図りました
衆を恃みとする敵は　此處を突破し退路を
開かんものと死者狂ひに成つて押寄せる
指揮班は懸命に弾薬の補充に努力すれば
新に増加した所二銃も黒山の敵に　銃腔も
裂けよとばかり猛射を送る　擲弾筒も亦敵
陣中に釣瓶射ち　流石熱り込んだ敵も我猛攻
に一時攻撃を阻止された様子であります
敵の死体は田といはず道といはず　一面に
折重つて居る　傷者の間へ呻吟する声も銃
声にのつて聞へて来る

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

此の時第二大隊長の指揮する第七中隊の主力が増援し来り　一小隊を左山脚に　他の一小隊を本道上に位置せしめ　退却する敵の捕捉殲滅を圖りました

× × ×

敵は尚も橋梁奪取を断念せず　更に數回に分れて相次いで突入して来ます　敵斥候の活動は一層激しく　兩側山脚に添うて後方に浸入し　陣内を捜索し始めましたので中隊長は新たに予備隊から數名の刺殺班を編成し　刺殺網を構成しました

この我刺殺網に罹り刺殺された數が百余名に達しました

本道上第七中隊方面に於ても殲に鐘声が聞えます　猛烈な突喊と射撃が絶へず反復されてゐる　この時迄我方戦死四　重軽傷九を出しました

師團司令部も到着して此の渦中にある事を聞き　將兵一同更に勇を振い應戦に努めました

此頃第一小隊の正面には　約百名の敵がクリークを渡渉して攻め寄せ　これを岸辺に潜んで居た一同は堤防に登つて来た所を一名も残さず撃ち河中に刺し落して水中に葬つたので　対岸に残つて此の光景を見た敵は後が続かず　此處も突破する事は出来なかつたのであります

數回連続的に橋梁奪取を試み　不成功に終つた敵は　其後暫くの間射撃突喊共に一時中止しました

此頃旅團より次の要旨命令を受領した

一　師團・旅團司令部ハ右山頂ヲ占領シ　更ニ前面ノ敵ヲ殲滅ス

二　第三中隊ハ死傷者ヲ第七中隊ノ位置ニ收容シ　天文台ノ右半部ヲ防禦スベシ

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

そこで第一小隊をして天文台への進路捜索及占領を命じ　第二小隊をして成る可く橋梁を中心に廣正面の陣地を取り　敵の攻撃阻止に任ぜしめ　我が移動を秘匿させました　第三小隊をして死傷者の収容に任ぜしめたのでありますが　一時沈黙してゐた敵は新に増加して更に攻撃を開始しました

我方は第一小隊は早や出発し　第三小隊又第七中隊の位置に死体患者の収容を急いでおります

後に残る第二小隊と中隊指揮班は　最後的決死の意を堅くして頑張り　彼我の銃声は拂暁前の暗夜に響き　又も此處に大激戦が展開されました

此の時第七中隊より吉岡准尉の半ア小隊が急援に来り　共に敵の進撃阻止に努めました

明方近く第三小隊より収容終るとの報告を受けましたので　先に示してある三段の後退法に依つて第一線小隊の後退を命じました

吉岡小隊は最後迄頑張り　桑小隊を一斉射に収容　更に吉岡小隊後退し峠に頑張り桑小隊を援護しました

此の時早や敵は我に尾して追急し　峠附近に於て彼我混乱の状況でありましたが　第七中隊主力の援護に依つて無事収容されました

第三小隊は患者援護の爲半ア小隊を残置して取敢ず中隊主力の位置に復帰　又後退中の第二小隊も中隊主力に復帰しました

間もなく敵は翰部に於て第七中隊と激戦を開始し　患者援護に残置してあつた半ア小隊は第七中隊の右に連繋協力し　山脚を前進して来る敵と激戦をなし　最も勇敢に奮斗して當面の敵を壊滅しました

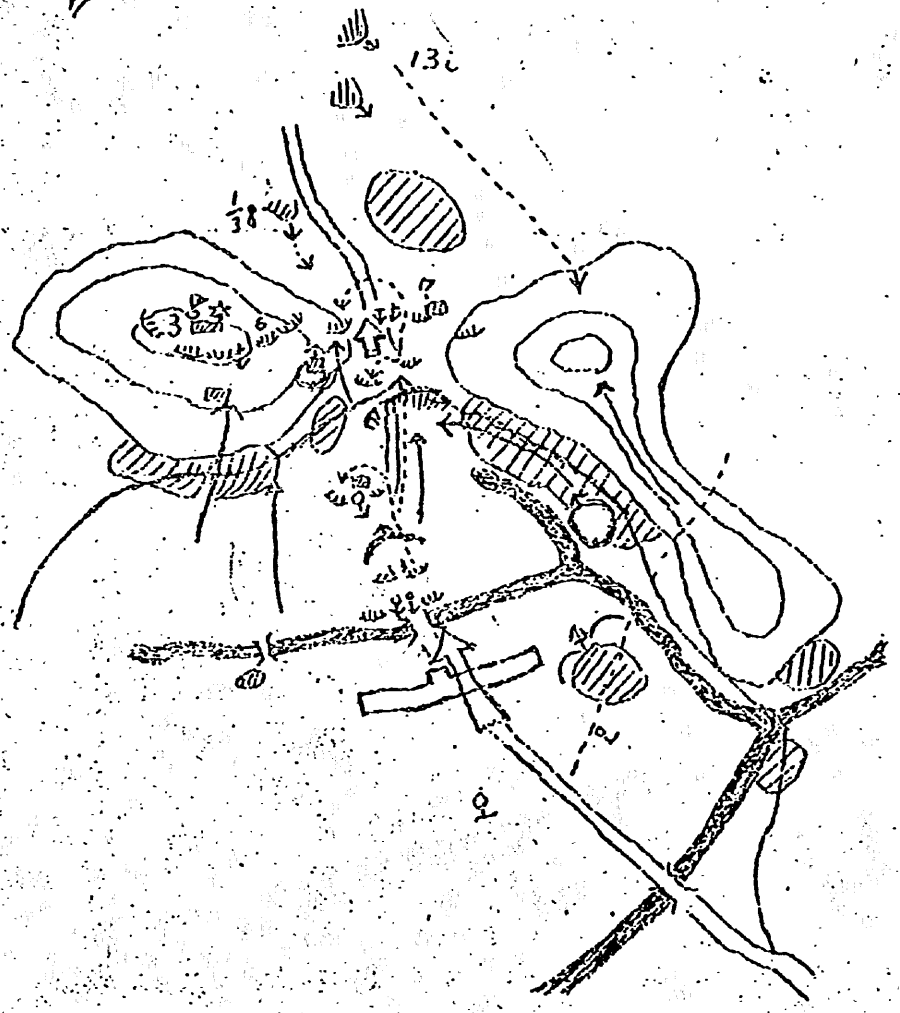
国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

中隊主力は天文台の陣地を占領し敵の攻撃に備へました時に〇六一〇東天次第に白み行き昨夜の戰場を眼下に見る

一部漏れたる敵は第八中隊及び歩十三聯隊の増援部隊に遭遇して完全に壊滅されました當時の狀況下記要圖の如し

既に夜は明り放れ山頂よりの展望は又一入雄大であります

〔天文台附近配備変更時態勢要圖〕
（十一月十日〇五三〇ニ於ケル）



国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

目を轉じて昨日の戰場を眼下に望めば　敵の遺棄死体累積し　橋梁又其の本道上は全く路面を見る事が出來ません　一面死体を以て敷き詰めたる有様は筆舌に渇し難く只唖然たるのみでした

暫くして中隊は旅團予備隊となり共に下山し対落に集結　戰死傷者を整理致しました

中隊橋梁守備の独立任務も　天祐神助に依り任務を達成する事を得ました

思へば北支轉戰以來敵の重圍に陷ること數回　然共北支張家東内の貴重な体驗等に依り大なる自信と決断力を以て　対抗し得たのでありました

幸ひ目に余る大敵を相手に　クリークを利用して一歩も侵入せしめず　支隊の行動を援護し　高等司令部の安全を保し　余山鎮一帶に二千余の遺棄死体を見るに至つた事は　我が皇軍の正義に神の御加護を賜りたるに外ありません

謹んで戰没者の御冥福を祈り　本戰斗に護國の神と化した六勇士及び負傷者十二名であります

戰友の屍體と共に

歩兵第四十七聯隊　第三中隊

上海方面より退却せる敵は　我が余山鎮陣地に向つて雪崩の如く殺到して來　こゝに言語に絶する悪戰苦斗が展開されました

當時白石分隊の一員として御手洗五月上等兵は　本道橋梁前に分隊一同と共に潜伏し敵兵捕獲を命ぜられると喜こんでその任に當り　中二十米のクリークを後に控へ　眞に背水の陣を布いて待ち構へました

間もなく三千の敵は大潮の如く押寄せて來

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

ました　とても捕獲の出來る様な敵ではあ
りません　まるで黒山のやうです
中隊は之が防衛上此の潜伏の引上げを命じ
ましたが　時既に敵は寸前の距離に迫つて
喊声と共に射撃突入して來ました
分隊は自石伍長以下八名死闘遂に敵を
突殺し投飛し　火の出るやうな格斗を演じ
つゝ対岸より引上げました
御手洗上等兵も同じく格斗中　横に居た副
田一等兵が「ア」と敵弾に殪れたのを見
ると群敵を物ともせず　傍の壕の中に入れ
て守りつゝ沈着にて奮戦する内遂に一人と
なりました　最早や引上げやうにも周囲は
敵兵で充満しております
（今はこれまで）と手榴弾二箇を抱き　全く
絶命せる副田一等兵の上に身を伏せ　万一
の場合は手榴弾で自爆せんと　朦朧にも敵
中に息をひそめておりました

敵は愈々猛威を逞うして最後的猛攻を敢行し
初めました　所が幸にも散乱する屍と同想し
て一向に気付かず　敵の指揮官は上等兵の伏
しておる上に立つて盛に下知しておりましたが
上等兵は身動ぎもせずじつとしております
「その間の時間の長かつた事は二年も三年も
否十年もの時日を経過した様だつた」
と帰隊後　上等兵の述懐です
躯て屍を築いて敵は夜明けと共に退却しました
上等兵は奇蹟的にも命のあつた事を半信半疑
に思ひ乍ら　そつと頭をもたげてみると　未
だ一門の砲が目の前に在ります　それで自爆
する筈だつた手榴弾を投げて之を使用不能に
陥らしめました
斯くて御手洗上等兵は遂に戦友副田一等兵の
屍を守り通して　然も微傷だに負はず中隊一
同に迎へられたのであります

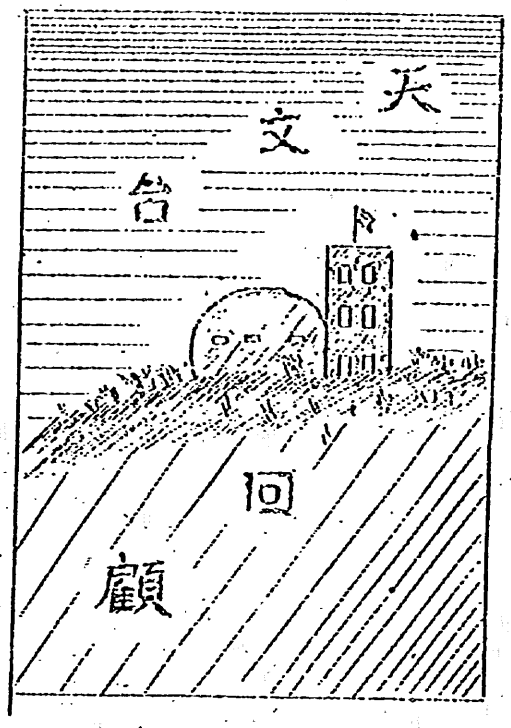
国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

敵弾雨注尚止まず

歩兵第四連隊　第三中隊

我が中隊は九日夕刻余山鎮に到着しました
こゝは上海及び松江方面よりの合流点で　本道の
両側には小高い山があり　西の山頂には近代建築の
塔を集めに仲園西の天文台があって　三色旗が
無心に靡いてゐます
中隊は本道を押へ主力通過の援護を命ぜられました
直ちに配備につきますと間もなく敵の大部隊
が数十の喇叭に呼応して黒山の如く押寄せて来ます
我々は之に対して戦械熱したりと　代中の射弾を
送り込むにして激戦が展開されました
銃声と怒声　叫喚と怒號が暗夜に交錯して物凄い
戦場　閑銃手　眞名井一等兵は　本道上の最重
要点の橋梁にあって　怒濤の如く押寄せる敵に対
して　自信ある射撃技術を遺憾なく発揮してゐ
ました　然し敵も仲々頑強です　宛ら岩に砕け
る波の如く殘れども〳〵續々と屍を乗り越へて来
ます　射撃した数日早や警戒線を越へ来り　あちら
でもこちらでも格闘の怒號が聞えます
戦闘意識を煽られた一等兵は逆着剣腕　愛銃に全
霊をうちこんで（しっかり頼む）そばから銃身も火と化
れと射ちまくりました　更に三十発を装填し間髪
を間断して数発の弾丸が火と化して銃口を飛出しました
吐!!　その時一弾は無念一等兵の頭部を　鉄帽の上から
貫通しました　がっくり　頭を打ち伏した一等兵は一語も発
しません　否発する暇もない致命傷で　しかし唇から
は少しも調子乱れず　弾丸は発射されてゐます　一等兵
の双手はピクとも性ず愛銃を握り　その指は引鉄にか
かってゐます　偉大と云ふべきか此の戦闘意識　一
パンくく　カチッ　射音は止りました　弾を射盡した
のです　弾薬手　芦刈一等兵が代って射撃しようとしま
したが握り緊めた手は銃より離れず　目は尚敵を
睨みつゝ　と之つに儘絶命してゐます
壮なりと云ふべきか人間の精神力……
嗚呼　この天晴れな最後は実に日本軍人の進軍を云へ世ラ

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp



歩一三ノ一〇 座談会より

榎田伍長

天文台の戦斗の時 隣りに伏せてゐた洲本君が急に

「榎田さん 榎田さん」

と呼びます

「何んな」

と答へますと

「わあ 來る來る……

ありゃ見なつせ 左からも ほう 右からも ほう 後ろん方の雲んごたつとも

ありゃ皆 敵ばいた 何万って來ると

いくら六師團が強かてちやタッタこしこん人数であれー向はすべ尊ぶろかハ

ほんだいぼしかト

と言ふのでした そうして

「榎田さん 榎田さん もう一ぺん あだが顔ば見せてハイヨ これがもう見納めですたい ほんに色々お世話になりました」

と 眞白目くさつた顔をして私の顔をしげ〳〵と覗きこむのでした

幾度となく押し寄せる敵大軍を前にして極度に緊張しておました私達は 洲本君のこの熊本仁〇加そっくりの仕草に クス

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

クスとふき出して仕舞ひました
然し本人は至極眞剣眞面目です
お陰で私達は急に頭から血が下りて落着
いた余裕のある気持で次の射撃命令を樂
しみに待つ事の出來る様な心境になりま
した

松田伍長

あの時は友軍は二ケ中隊半位でした
それで二萬からの敵に包圍された形にな
つたのですから　容易なことではありま
せんでした
然し不思議なことに　あゝした際迫した
中に睡魔が襲つて來て　一寸射撃の手を
休めると居眠りを始めて開口しました
江口といふ戦友等　敵に相対峙したまゝ
グー〳〵　鼾をかいて寝てゐます

そこへ丁度平場隊長殿が來られて　軍刀
でつゝき起されたそれを私がしたのか
と思つて
「どうして起すか」
と文句を言ふのです
何處まで心臓が強いのかと呆れました
夜が更けるにしたがつて　益々居眠りが
始まる　我慢が出來ない程眠たくなりま
す
それを隊長殿は後から軍刀でつゝいて廻
られてゐましたが　とう〳〵業を煮して
藤本曹長殿以下全部立たされました

飯島中尉

平場隊長殿は火の国阿蘇の申し子の様な
豪快な方でした
随分と薫陶をうけたものです

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

体躯堂々として一号の服が小さく着用出
来ませんので　外套の裾の方を切つて
それを上衣の代用として居られましたが
「鬼千場」と　その勇名は敵方にも轟いて
居りました

木村軍曹

天文台を占領して　千場隊長殿が配屬重
機で敵を制壓して居られる時
師團長閣下を甲斐大尉殿が御案内されて
天文台の家の中に押上げる様にして入れ
られましたが　弾丸の中の苦労は　將校
も兵隊も皆同じで
「一將功成つて萬卒枯る」
なんて言葉は　本家の支那は兎も角　皇
軍にはとても考へられません
それを思ふと勿体ない様な気が致しました

た

榎田伍長

その翌拂曉のことです
閣下が　ツルの折れた眼鏡を糸を重ねて
修理したのを耳にかけられて　泥に汚れ
た服をつけられて
「大分あるのう」
と　敵を睨みつゝ下りて来られました
千場隊長殿が双眼鏡を眼から離されて
「只今から千場はあれを一斉射撃します」
と云はれて　視野の廣い前面を　重機が
裏赤に焼けるまで撃たされました
竹藪や木の枝がボキ〳〵　折れて行く　敵
大軍が將棋が倒れるやうに　バタ〳〵と
撃ち殪される――
此の様を御覧になつて

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

「痛快だなー」

と、ニンマリされた閣下のお顔を拝して皆嬉しく勇気百倍の思がしました

夜が明けてホッと一息―朝飯を炊きに屍体の一杯ういてゐるクリークで 脂を除けく水を汲みましたが 長い戦爭の間にも こんな事はそうざらにはありませんでした

昭一三ノ三

☆

金子 範義

もろともに見れば やと思ふ我戦友は
苔の下なり 秋の夜の月

☆

橋本 信一

砲撃に両手なくした戦友の
雄々しく笑ひ紅にそまりて

☆

長本 信以智

ものゝふの攻め戦ひし跡に立ち
夕陽あびつゝ胸迫り来ぬ

☆

猿渡 文吉

陣中で炊事するたび思ふ哉
やさしき母のかゝる姿を

☆

今村 秋先

亡き友の仇を討たんと吾先に
ますらをどもは進み行くなり

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

余山鎮の激戰

黄兵中尉　吉田盛光

十一月九日〇六三〇　南庫を出發した師團司令部は松江西方道路を　余山鎮に向かました

松江は國崎支隊が入る事になつてゐましたので　第六師團は西の方約五六百米の畦道を通つて青浦に出るやうになつてゐました

其處を行軍中　松江方面からさかんに射撃をうけ　行軍序列中にも迫撃砲彈四發も見舞はれ　十數名の負傷者を出すに至つたのでありますが　寸時も早く北進して上海方面の敵の退路を遮斷すべく　それを相手とせず　どん〳〵北進を續けました

約二時間の後畦道から抜りて支道に出ましたが　此の

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

附近はクリークがとても多く、舟を探して渡るといふ狀態で行軍も遅々として捗りませんでした

支道を暫く行きますと、道路の東方約三百米附近（圖上では二本が本道らしく支道に並行してゐる）に自動車のヘッドライトが見へます

「下野參謀長殿も「変だな」と考へこんで居られましたが

「要心して進め」

と云はれて　その儘前進します　その光は遥々として　我々の行軍と平行してゐるのかと思はれる位でした

愈々余山鎮に這入ります

その五百米南方の小部落にさしかゝる頃は

師團司令部は旅團司令部を後にして居ました

「余山鎮に敵あり」

といふ情報が入りまして

「道路を進まず暫く待機」

の命令により　一時停止しました

しかしいくら待てども情況は不明

前方には已に友軍が出てゐる筈だといふ判断で前進を開始する事になり　下野參謀長殿より

「煙草を絶対喫ふな　話をするな　靴音を低くせよ」の

御注意があり　それこそ皆緊張して実に肅肅たる前進が始められました　しかし朧月に鉄帽が淡く照されてゐるその光を的に

畏れはしまひか　といふ心配たるや亦相當なものでありました

やがて本道から巾二十米位のクリークがあつて　それには橋が架けられてありますが通行危険な橋ですから一部の者は舟で渡る事にしました

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

舟を探しておますと 上流から二艘流れて
来ます 二水幸と取って中をみますと 女
子供が四五名居て手を合せて泣いておます
「まだ怪しい」とよく調べてみると敗残兵
が十何名とかくれておました
橋を渡り 余山鎮東側を進む中 先頭は早
や本道上で敵と衝突しておます
余山鎮は右に山 左にもそれに対して天文
台のある山があり その間の狭い所を本道
が通っておます
「歩兵第十三聯隊第十中隊ハ西ノ山ヲ右領
スベシ」
の命令が発せられました
本道から三百米 橋の西には歩兵第四十七
聯隊第三中隊第一小隊が出ておるのが分り
ました 敵は両方の山に居ます
その時誰かが煙草に火をつけました

すると それを目標に百雷の一時に落つる
が如き乱射乱撃を受けました
師団長閣下始め全員地物を利用する暇もな
く その場に伏せました 弾着は比較的正
確で近い 敵は笛や喇叭で喊声を上げて
突撃して来ます
閣下の護衛としては所二ヶ分隊 小銃一ヶ
分隊しかおません 騎兵衛兵は上陸後のラ
リーク泥濘で前進出来ず 金山に残って
今居りません
すぐ閣下を家屋の裏側に案内して左右に所
を配し 身辺は小銃分隊が着剣で警戒致し
ました 両方何処も皆敵です 北支通況以
上の不安を感じました そして衛兵には
「発砲するな 発砲するどころ 位置が
分る 近寄るのを待って突殺せ」
と悲壮な命令を達しました
石原少尉の対空班は西の山の左領に協力す

0254

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

る事になり 義勇力良く駆け登つて行きます
が、敵が必死撃しで苦斗してゐるのが宜く分
ります
此の折歩兵第四十七聯隊第三中隊第一小隊
の橋の所の軽桟が故障で使用不能になつた
から所を貸してくれ と言つて来ました
師団長閣下は僅かな手兵の中から所一ヶ分
隊出せば、後は相當心細いのであるが そ
れも覚悟されてゐるのか 中野副官殿をし
て
「吉本 お前行つて来い」
と申されます 私は聞いた頭の下る思いが致
しました 中野副官殿が
「残りの衛兵は俺が指揮する 心配するな」
「お願みします 井・入口・丸岡・田山・工藤・八田
前田 敵が来ても一歩も入れるな
所分隊! 竹本伍長! おゝそこにゐるか
よし!」

の声を残してすぐ内田伍長の指揮する所分
隊を連れて橋の所に急ぎました
行つてみると橋の向ふには敵が道路上に一
杯出てゐます 据へる暇ももどかしく射撃
しましたが 将棋倒しに倒れるのが面白い
程でした 逃げ道を閉いで射つので右往左
往―― クリークに中に落ちこむやら 這
上つて来るのを射つやら 実に面白い程で
した 併し殺すか殺されるか 全く切端つ
まつた息詰る戦斗でありました 歩四七の
兵が橋の向ふに戦死してゐる事は聞いてゐ
ますが この乱斗にはその死体収容に行く
事もどうする事も出来ません
當時内田分隊は 内田伍長・山本・浜付上等兵
水野・高木一等兵の五名でありましたが 全
員涙の出る程良く協力してくれました
殊に内田伍長などは 又も白露戦役で功七

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

線をもらつてねられる丈あつて　機関銃の前棍を引抜いて前進して来る敵を打ち殺す等　この又ありてこの手あり　目覚しき奮斗振りでありました

午前三時頃天文台を占領したので　師団司令部はそこに浸入して行きました　五時頃になつて敵弾も漸くパ止みになり　朝になつて引上げ余山鎖のふもとに来て復帰しました

附近一帯には　三々伍々逃げる敵がいくらも居ます　それを片端から射殺しました

下野参謀長殿は

「弾丸がなくなるから射つな〳〵」

と云はれますが兵は仲々貴きません　再三の御注意でやつと止めました

山を下りて橋の所に行つてみますと　橋の向かは道の両側のグリークと言はず路上と云はず物凄い程でありました

その死体の中に将官二名　軍旗二流あつたとの事でした

敵は十万師に及び総数二万を下るまい――遺棄死体だけでも三千余を算しました

余山鎖の思ひ出

歩兵衛兵　庄司公ヨリ

入口戍第軍曹

夜間に苗ヶ例のピーヒョロ〳〵といふ喇叭を吹いて逆襲するのは　全く気味悪いものです　その翌朝になつて又喇叭の音がするので

「そら、敵だ！」

とばかり銃剣で構へてゐましたが　それ

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

は敵の喇叭兵を捕へて　そ奴に吹かして
みたのだったそうです

吉本中尉

内田機関銃分隊が　朝五時頃引上げて暗い中を天文台に向って登ってゐると　どうも人数が多い　そこで内田分隊長が立ち止って数へてみると　後の方から敵兵が三名跟いて来る　高木一等兵が
「敵だ！」
と叫びますと　内田分隊長が
「この餓鬼奴が！！」
と　機関銃の前梶で頭を叩いて蹴落してやりました

丸岡正臣軍曹

山の上で一段落して眠ってゐました

眠つたと云つても三十分もないのですが
朝食の準備をするといふので　全員起きました
すると　すぐ前で敵が正規兵が三名同じ様に居眠りしてゐますので　早速捕ました　彼が云ふには
「私は支那軍の炊事兵で本當の兵隊ではない　それで本當の戦爭もしないし　亦　日本軍に抵抗もしないので殺さなくていいでせう　何卒助けて下さい」
と哀願してゐました
定に自あの時は入れ交つてしまつてゐました

吉本中尉

朝　戦跡見学といふ軽い気分で　昨夜の激戦地の橋梁の所から二十米程西方に行

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

つてみますと　松の木のある丘の所でサ〳〵と音がします
（敵だ・・）と　直感してみてゐると　敵の巡視兵が一名立ち上りました
たゝきつけてやろうと　軍刀を抜き　前の畦の所へ飛び出ました
「パーン！」と　音がしたと上つてみると　自分の銃で自殺してゐました　敵作ら感心な奴でした
今度は道の東側の家から　二十四・五歳の立派な支那服の　何か高位高官の人の奥様とも思はれるやうな婦人が　トランクを持つて出て来　天文台の下を通つて向ふへ行きます
捕へ様と思ひましたが何分川向ふの事ですし兵隊に捕へろと云いましたが　クリークの為それも出来ず

（逃がしませうか）と言ふ兵隊を
「相手が女だからそうする事も要らん」
その間にサッサと見えなくなつてしまひました

丸岡軍曹

私も朝　戦跡を通りましたが　累々たる敵屍体は実に見事といふ程でした　馬の下になつてゐるのもあり　重り合つてゐるのもありました　その間々に毛布にくるまつてゐるのがあります
（此奴おかしいぞ）
と銃剣の先で毛布をはねてみますと　足をやられたり　負傷したり逃げ遅れた奴が死んだふりをして隠れてゐるのでした
こんな奴が全部で二三十名位は居りましたでせう

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

西上等兵

前の夜 煙草の火で敵が一斉に射撃を初めた時の事です
皆一様にパッと伏しましたが 中野副官殿や隊長殿が師團長閣下の位置が悪いので家の方に案内して行かれる途中 閣下も姿勢を低くして行かれました
その時私は 足をいやといふ程踏まれました 誰かと思ふてみると閣下でした
今にして思ひまするに 一生一代の記念にあの時傷の残る程踏んで戴きたかつたと惜しく思はれてなりません！！笑聲…

加藤伍長

自分達は戦斗司令所に來るのが遅れた為
平岡高級副官殿の指揮で第二班として追及してゐました
余山鎮の手前にさしかゝりますと 向ふから白旗をひるがへした千名近くの敵が投降して來ます
こちらは只一ケ分隊の僅かの兵です
投降の意味は分つてゐますが こつちの兵力の僅少を知れば敵はどんな事をするか分らない そう思ふと不安です
それで分隊員を大きい距離に配置する空擬装に苦心し 通訳を伴つて先づ敵の隊長を呼び そして兵の武装解除をなさしめました
その間 敵の隊長をしつかり摑へた儘非常に緊張してゐましたが こちらの兵力の少いのでとても苦心しました

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

谷師團長閣下と兵隊

---- 歩兵衛兵座談会より ----

吉本中尉

師團司令部は十日 余山鎮を出発して青浦に向ひました

杭州湾上陸後の泥濘行軍で重火器部隊は続かず 隨分困つたものでした

殊に歩兵第四十五聯隊なんかは僅か二ケ中隊（一ケ小隊欠）といふ聯隊本部も心細い状態であります

閣下は自分の護衛所二ケ分隊を歩兵第四十五聯隊の方にやられて 残るは只 井軍曹の指揮する小銃一ケ分隊七名（長井伍長 入江 丸岡 角田 上等兵 工藤 前田 二等兵）のみといふ少数で行軍をされたのであります

自分の手兵までやってしまはれる閣下の深い御心に歩兵第四十五聯隊の將兵一同 感泣した事と思ひます

井 正下軍曹

十一日 青浦城壁を過ぎて二百米位行き小休止しておました

歩兵衛兵 前へ

といふ中野副官殿の声に走って行ってみると 左方に道から十米程離れて一軒家があり そこに閣下が居られます

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

中野副官殿が
「此の家に敗残兵が居るから」
と言はれますので這入って行きますと
三・四名居ます　早速引出そうとすると一
斉に逃げ様とします　中野副官殿の拳銃
が連續の気味よい響を残しました
閣下が申されますには
「今儂が休憩しやうと一人で這入ると敗
残兵の奴がねるぢやないか　びっくり
したよ」
と言って笑って居られましたが　私共護
衛衛兵が後方に居て申訳なかったと思ふ
と共に　萬一の事でもあったらと勿体な
い様な気で一杯でした
それに就けても　閣下のやうに　こう御
一人でピョコ〳〵飛び出されては　正直
の所私共の心労も並大抵のものではあり
ませんでした

北岡軍曹

白鶴港鎮に着いたのは日暮頃でした
こゝでも敵が襲撃をうけて　大きな米倉
の所に閣下の宿舎をこさへ　入口には只
戸板を立てかけたのみにしてその前に立
哨してゐました
たしか一時過頃だったと思ひます
脇に銃をして警戒してゐますと　どうし
たはづみか床尾板が戸板に當って　「アッ」
と思ふ間もなく倒れてしまいました
（失敗った）
と思ったが　もうどうにもなりません
それが遅くも中に寝てゐられる閣下の耳
に當ったのです
その時静かに声はれました
「歩哨」「ハイ」
「これからはこんな事がない様に気をつ

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

けて次の歩哨にも申送れよ」
と物静かに訓す如く叱られましたが　その
の一言一句身に沁みて有難いやら　申訳
なさで一杯でした

入口軍曹

余山鎮で初めて支那馬を徴発して　それ
に御乗りになりましたが　それ迄はずつ
と　兵と一緒になつて流れ丸になつて
お歩きになつたのです
「儂ばかり乗つては申訳ない　お前も乗れ」と
坂井旅団長閣下と交替に乗られました

丸岡軍曹

鳳山の前　線路の前に休止してゐました
右側が土手で　それに倚りかゝつて兵隊
が皆休んでゐました

それに遠慮された閣下は　線路の向ふ側
即ち敵の方に向つて小用を始められました
敵の小銃弾がべう〳〵と飛来しますが
その中で悠々と了へて帰られました
仲々豪膽なお方でした

吉本中尉

蕪湖で交替される時のお話です
閣下は日頃書が大変お好きでありました
某日閣下は私を呼ばれて
「吉本　衛兵に揮毫して貰い度い者が居
るならば　今の中に紙を持つて来い
書いてやるから…」
との事でした
早速この旨を告げますと　自分も俺も
三・四十枚位集りました　それを持つて伺
つてみますと　丁度夕食中でありました

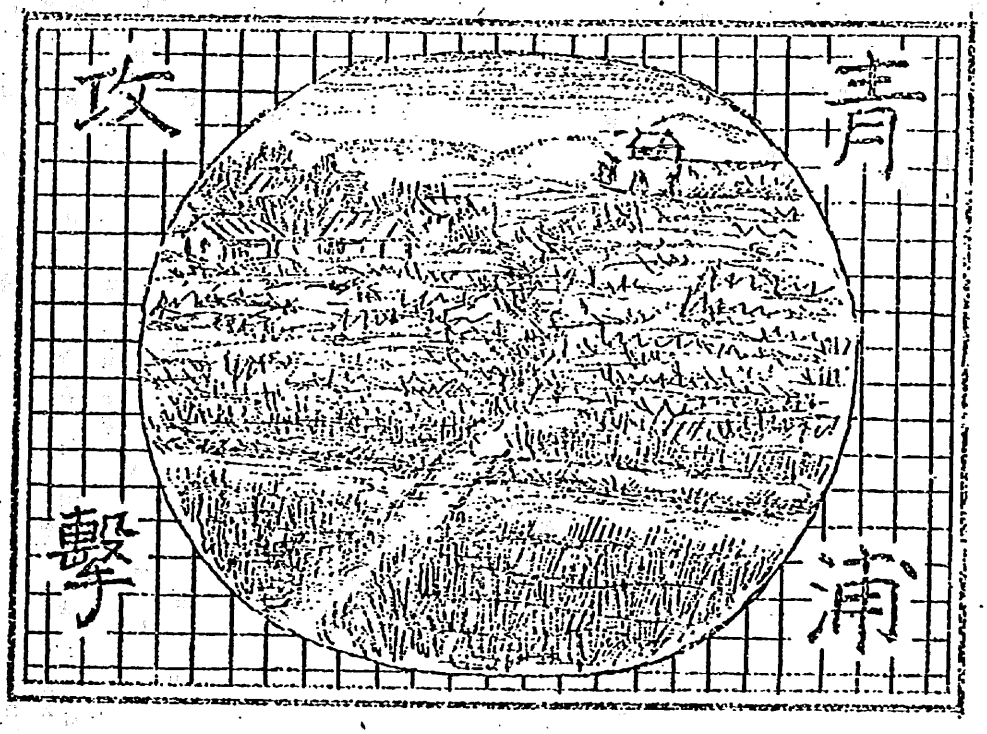
国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

が快よく招じて下さいました
仲々根気が要るのを一生懸命に書いて居
られます
「閣下 暫くお休みになっては如何です
か」
「ウ 一服喫はうかな」
と 煙草を喫はれて 亦お始めになりま
す
半分もお書きにならない中に 十二時に
なってしまひました 部屋の外には未だ
紙を持って待ってゐます
お側に居る私は御気毒でたまりません
「閣下 もう明日で結構でありますから
御寝み下さい」
と 申し上げますが 平気でそんな事に
は無頓着そうに 御念を入れて書いて居
られます

室外に待つてゐる者のまで御承諾されま
して 午前二時過ぎにやっと終りました
「吉本 こいだよ軍人はな」
と ニッコリ笑はれて 御気嫌よくお寝
みになりました
無言の裡に 有難い御教訓にあずかつた
事を今尚感銘深く 感謝申し上げて居る
次第であります

井置曹
あの時御揮毫して頂いた一人であります
が 一生忘れる事の出来ない尊い御教訓
と共に 此の上もなき宝き記念品として
亦家宝として終生大事に致し度く思って
居ます

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp



青浦縣城に日章旗を仰ぐ迄

歩四七ノ二
歩兵大尉　吉田竹八

昭和十二年十一月十日　〇一〇〇天文台西方約三粁干歩に到着して露営さし　軍旗中隊となつて軍旗を守護し　四周に対して警戒しつゝクリークを通る舟を監視しました

其處は青浦に通ずる本道の橋梁の傍で　支那兵の宿営した跡が歴然たる二軒の汚い家がありました　警戒網にかゝつた舟は十二隻でした

東方天文台方向には盛んに銃声がし　北方には青や赤の信号弾が揚つてゐました

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

携帯口糧はもう無くなつてゐて明日の食物はない　通過する地方舟より支那米の玄米を買上げて分配し晝食まで準備しました

○八.○○同地を出発して一〇.○○樂家迳に達した　坦々たる道路上には　彈薬　被服其の他の軍用品を積んだトラックが沢山遺棄してある　敵の狼狽振りがありく残つてゐます　樂家迳に着く頃には　何處からか流彈が飛んで來てゐました

中隊長集合を傳令が傳へて來た　そして第四中隊と軍旗中隊を交代して　左第一線中隊として青浦城の攻撃を命ぜられました

昨九日より軍旗中隊を交代しては戰斗し又軍旗中隊となり　更に交代して戰斗する事此で三回です

右第一線は第一中隊で　中隊は一ヶ小隊は大隊予備に取られて機関銃一小隊（小隊長佐藤誠一准尉）を配屬せられた

戰場は平坦地でクリークは縱横に走つてゐる　稻は實つて風に吹き倒され　所々に刈干したり　束ねて積んだりしてあつて　其の間に部落が点在しクリークには　本道上の橋と其の直ぐ南側に旧道の橋があるのみで　それも半破壞されてゐました

クリークは絶対に徒渉を許さず　利用すべき舟もなく　大隊の戰斗地域は本道以西で右第一線は第三大隊でした　中隊は竹原小隊を大隊予備として残置し　第一中隊に續いて其の西方部落に移動　本道東側のクリークは深くはなかつたが

「浜までは海女も蓑きる時雨かな」の歌の如く　徒渉する者は一兵もなく　皆狹い假橋を一列側面縱隊で通つてゐると　早速狙撃をされました　みんな散つて本道に出て其の西側の部落に取りつゐた　部落の北端には竹林があつて　其の中央に目通り直径

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

三十糎位の楊の木があります　私は其の楊の木を利用して　前面の敵情地形を視察して　小隊長に命令を与へてゐたところ　直ぐ右側二米位に機関銃の集中射撃を受けて五寸位の竹が打ち切られて仕舞つた

第二小隊を右第一線　第三小隊を左第一線　機関銃小隊は両小隊の中央後として　一〇三〇　楽家泾西方クリークの線に展開して攻撃前進しました　稻があるので田の畦を通るより外仕方がない　何處からか敵は重機軽機を以て狙撃してゐる　重い背嚢を負ふて稻田の中の前進は極めて困難です

青浦城外東南方約八〇〇米の

徐家浜及其の東側集団家屋には　家屋を利用して堅固な陣地を構築して殆ど掩蓋となし　銃眼より機関銃　チェックを以て猛射をしますが　其の位置はハッキリ分りませんが　徐家浜より約五〇〇米西朱家泾南側に東西に通ずる大きなクリークがあつて　右第一線中隊の正面本道に接近してある唯一の階段式の石橋は破壊されて　幅一尺位の石材が一つだけ残つてゐた　舟はないし其のクリークを渡る為には　両中隊が全員一人づゝ各個躍進するより外に方法はない

第一中隊は遂次躍進してクリーク北岸に移動してゐる

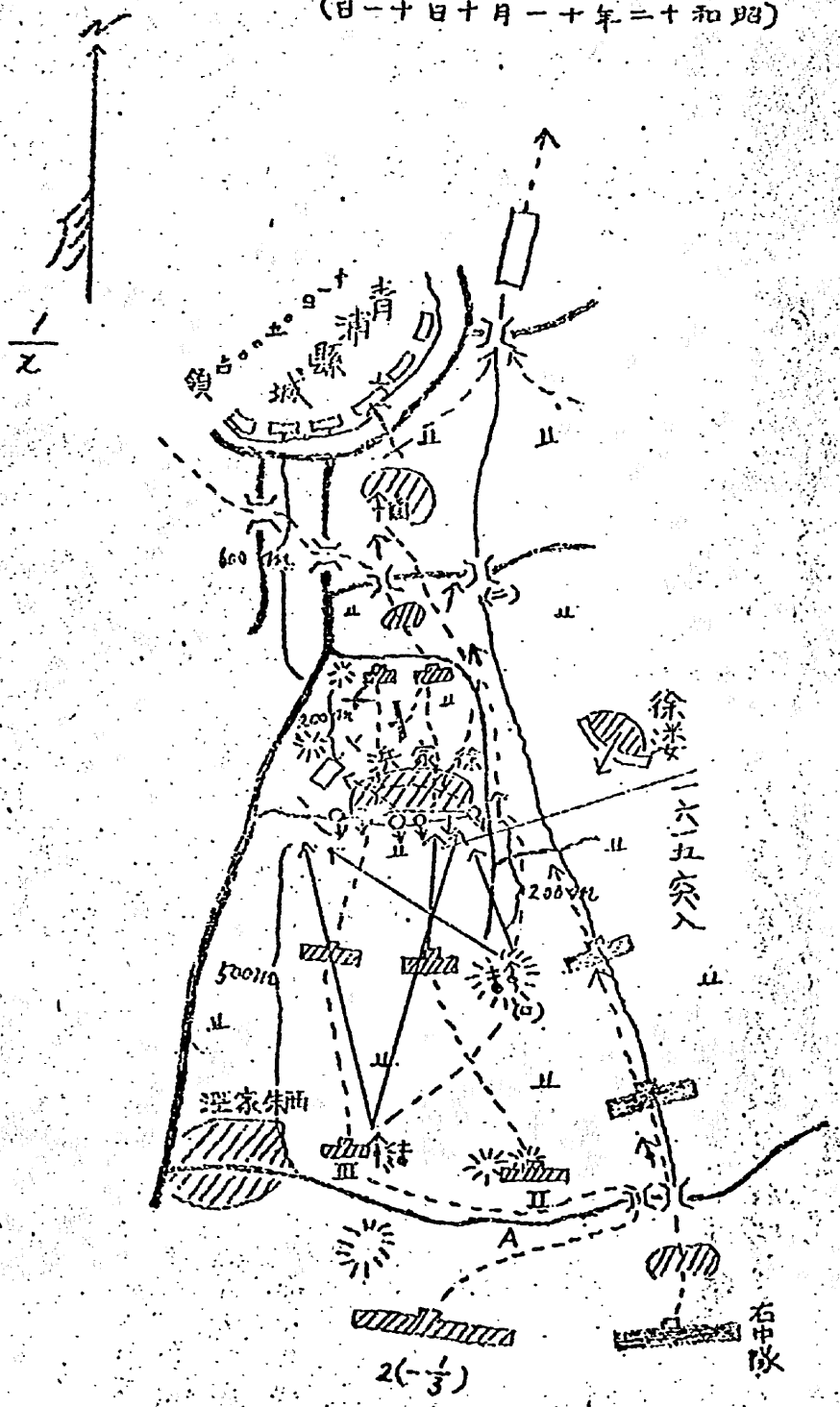
敵は其の橋を狙つて　其の弾着は極めて正確です　無我夢中で走つてゐる兵の前後に落達して手に汗を握らせました

中隊は遂次右方に移動し　橋梁通過の準備を整へ　第一中隊に續いて石橋を各個躍進して　第一中隊の左の墓地に前進しました

敵前を二回も三回も横行せねばならぬので危険率は極めて多く　敵から見れば中隊長も小隊長も分隊長も兵も同じです　誰に弾

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

第二中隊攻撃経過要図
(昭和十二年十月十日)



国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

丸があたるか分らない
私も全力をつくして石梁を躍進した
修養の足らぬ爲かも知れないが悠ことは通れませんでした　敵の位置ははっきり分らない　機関銃で銃眼と思はるゝ所を射撃すれども　敵は一寸も怯まない　大砲は一門も到着して居らず　地形は稻田で躍進は極めて困難　其の上予期せぬ所にクリークがあつて我に最も不利であります
クリーク北岸で晝食をさせ　命令によつて其處に背嚢を卸させて敵情を確め　攻撃前進の機を待ちました　其の間可成り時間が経過して　大隊長殿もせかれてゐる様に見えましたので　未だ兵の一部は食事をしてゐましたが　第一線小隊に攻撃前進を命じて　私は敵陣に向つて眞直に躍進した
佐藤准尉の指揮する機関銃は　同時に射撃を始めたので　約一〇〇米位前進する間は敵も沈黙してゐたが　暫くすると敵の寸字火を浴びた
一生懸命に走つて低い田の畦を利用して停止　傳令の川上光則上等兵も直ぐついて來た　直ぐ左の墓地には第三大隊の一ケ分隊が取付いてゐて　既に四名の死傷者を出してゐる　我が第一線小隊も前進を起したが敵の猛射を受けてなか〳〵進めない
私は傳令と二人で田の中に伏せてゐると敵彈は頭上をかすめてヒユツ〳〵と唸る
自分一人で出なければよかつたと思つた位でした
第一中隊は逐次前進をして中隊長立川大尉は　約三十米位前に停止して敵情を視察してゐる　暫くすると二三人中隊長の附近の稻束の蔭に駈つて行つた
後で知つた事ですが　其の時立川中隊長は重傷を負はれたのでした

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

中隊も逐次前進をして來た　左の墓地に移動したところ其處に居た分隊長が
「中隊長殿　其處は狙はれてゐるから此方にお出下さい」と安全な所を教へて呉れた
墓地の横に便槽が一つ有つて藁をかけてあつた　其の間から軽機で射撃させたところ直に射ち返して來たので遮蔽をさせた
躍進をして來る中隊に対して　敵彈は集中されて死傷者は次ぎ〳〵に出る　配屬機関銃も重い銃と彈薬箱を背負つて躍進して中隊長の位置に來ました　第三小隊はずつと左に行つた為すだ遅れてゐる
敵の位置を確認しようと努力するけれども分らない　敵は益〻猛射をする　擲彈筒の彈薬も次第に少なくなつて來た
私は一三、二〇　次の報告を書いて大隊長に意見を具申しました

報告

一、中隊ハ目下　敵前近キハ二〇〇遠キハ五〇〇米ニアリ
二、敵ハ左前方部落端家屋ニ銃眼ヲ設ケ正確ナル射撃ヲナス
三、部落東端ニハ「グリーク」アリ　正面ヨリ攻撃不能　依ツテ中隊ヨリ攻撃ナス為ニハ敵前ヲ側方ニ移動セザルベカラズ
四、以上ノ如クナルヲ以テ　大隊ハ一部ヲ以テ　敵ノ左側背ヨリ攻撃スル方可ナラン
五、飛行機ト連絡シ　燒夷彈ノ投下ニヨリ敵ヲ掃蕩スルヲ可トセン
暫くして大隊本部に速射砲が到着したとの通報があり　直に敵の銃眼に対して射撃しました
我飛行機は敵陣地に対して爆撃をした
何だか百萬の味方を得た様にあつたが　敵は依然猛射を續けてゐる

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

中西軍曹は傳令を連れて擲彈筒の彈薬を持って來た　そして

「速ニ敵陣地ヲ奪取セヨ」との大隊命令を傳へた　自分も一刻も早く奪取しようと努力してゐるのですが　容易に進めなかつた

第三小隊は逐次躍進中である

先に大隊長に報告した地形の報告は間違つてゐた

部落東端のクリークは徐家浜の南側を取り巻いてゐると思つたのは　今私の居る墓地の西側附近で切れてゐて　其の左の方は稻田が續いてゐる

最初私は徐家浜の東端より突入しようと考へたのですが　其れは出來にくい事で　中隊主力は敵陣地の正面より突撃前進するより外方法はない

大隊長は中隊長の位置に來られて　頻りに

「早く突撃せよ」と云はれる

處置をせねば　此のまゝでは突撃は出來ない　そこで發煙をして其の効果を利用して突撃しようと考へ　湯浅進尉に發煙班の編成を命じました

村上上等兵を班長として　赤星上等兵及び柳井藥師寺両一等兵が選抜された

第一線小隊は逐次突撃準備を整へてゐる

第三小隊第三分隊長　足立榮伍長は第一線増加を命ぜられ　躍進中私の眼前で壯烈な戰死を遂げた

發煙班が發進すると同時に機関銃小隊長佐藤進尉は掩護射撃を始めた

村上上等兵を先頭に約七八十米前進した發煙班は直に發煙した

藥師寺一等兵は途中負傷し　材料は少なく發煙の効果は少なかつたが　私は此の機を利用して突撃前進を命じた

我が第一線は一斉に前進を起した

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

敵彈は突撃部隊に集中する
第一線は四五十米前進するや　稲田の中に
倒れる様に伏せた
湯浅准尉以下の一團は　右側クリーク内を
潛進して敵前約三十米の祠に取ついた
准尉は部落東北角より　敵兵二三名退却す
るのを目撃して
「今だッ」　と叫ぶや　傍に居つた上等兵
阿部寛は敵陣に向つて突進すれば　續い
て一等兵李鹿男　同田北親男　我後れじと
突進し決死の數名は一丸となつて　部落東
南角に突入した　時に一六一五でした
之と同時に第二第三小隊も突入した
湯浅准尉は此等決死の突撃部隊を指揮して
直に李一等兵に命じて藁屋根に火を放たせ
た　東風強く敵方に吹きつけて　火は見る
〳〵内に燃へ拡ろがり　火煙は一瞬にして
敵陣を蔽ふた

敵は火煙に包まれ乍も
手榴彈を投げたり　拳銃で射撃したりしま
したが　我が第一線は此と接戦格斗して部
落内を掃蕩し逃げ惑ふ敵を刺射殺して　部
落北端に進出しました
部落内の遺棄死体は三五の餘　逃場を失つ
た敵は稲藁の蔭にかくれてゐて　発見さる
〻や手を合せて拜んでゐた
中隊は煙幕に蔽はれてどん〳〵突進して
煙のために天日黄く末だ曾つて　こんな煙
の中を攻撃前進した事はありません
徐家浜北方約二〇〇米まで行くと幅十五米
位のクリークにぶつかつた
クリークの辺りに墓地を利用して敵方に対
して遮蔽し　斥候を出して渡河点を偵察さ
せたけれども　橋も舟もなく勿論徒渉は出
來ません

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

其の時徐家浜西側附近から密集部隊が前進して来ますので　敵と直感して射撃を命じましたが　煙の為にはつきり分らず　味方の様にもあるので射撃を一時中止させて眼鏡で良く見ると敵である
初めの集団は約二〇〇名續いて　更に三〇〇名が前進をして来る
中隊は前後に敵を受け而も　前にはクリークがあつて渡河不能です
前方の敵に対しては墓地を利用して遮蔽し後方五〇〇の敵に対しては　田の畦を利用して一斉に射撃を開始しました
敵との距離は約二〇〇米　中隊の後尾は末だ徐家浜を離れたばかりで敵の側面にあり其の距離は一〇〇米位であつたので　完全に之を包囲殲滅しました
其の間一等兵須川作次郎は裸体となつてクリークに跳び込み対岸に泳ぎ渡つて繋留してあつた筏二個を奪つて来て　之を以て假橋を作つた　中隊は其の假橋により渡河し一挙に青浦城東南側部落に殺到した
其處で南門を攻撃せよとの命令を受け　南門の重機より狙はれてゐる石橋を各個に躍進して　約一ケ小隊渡つた時　再び元の處に引返して来いとの命令が来た
「たつた今　命がけで橋を渡つたのに」と思つたけれども命令である　そこで私は家屋を利用して南門の敵情を視察した
すると敵はそれを発見して重機の射向を変へた　其の瞬間を利用して
「今だ」と叫んで各個に躍進して橋を渡り　部落南端に集結して　二宮伍長以下二名の斥候をして　青浦城東側クリークの状況及敵情偵察に派遣した
クリークは舟による外渡河出来ない事が判つた

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

中隊は右第一線として第二中隊の右に本道を含み　其の以北の地区に第九中隊に連繋して攻撃準備を命ぜられ　一八、三〇攻撃準備を完了した

背嚢は晝間攻撃の際後方に卸して来たので器具を持たない　勿論糧食も持つてゐない

朧月夜であり　且城外や後方に火災がある為　容易に通視せられるのです

第二小隊は中隊長直接指揮し　第三小隊は本道に沿ふ稻の立つてゐる田の中を夜襲隊形を以て肅々と敵陣に迫りました

私は清成伍長以下三名を斥候として　城壁東側のクリークの狀態及其の附近の敵情を偵察させた　清成伍長は敵の監視線を潜つてクリークに至り　該クリークには舟なく　且徒渉出來ざる旨を私に身を接近させて報告して居る其の瞬間　左胸部盲貫銃創を受け

「中隊長殿やられました」と極めて明瞭に報告した次いで

「天皇陛下――」の声もかすかに

一九、三〇壯烈なる戰死をとげました

私は晝間は目前で足立伍長を戰死させ　今又清成伍長と肩を並べてゐて戰死させました　無念やる方なきものを感じました

敵の組織は次第に激しく

なつて來る　右中隊とはまだ連絡はついてゐない

そこで早速　湯浅准尉に第九中隊と連絡せよと命じ　更に甲斐伍長以下五名をして前方稻田を掃蕩させました　甲斐斥候は敵兵五名を刺殺したが　柳井一等兵は刺創を受けた

此より先　南伍長吉武一等兵も負傷してゐた　柴山衛生上等兵を大隊本部にやつて

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

情況を報告し　且死傷者收容の準備を依頼
した　敵は尚クリーク東側稻田に潛伏して
我が兵の移動する毎に狙撃をする
兵は連日の疲労で此の緊迫した中に鼾をか
いて眠ってゐる者もあつた、それを眠らせ
ないやうに一苦労しました
二二〇〇次の大隊命令を受領した

大隊命令

一、當面ノ敵ハ更ニ城壁ノ陣地ニ據リ抵抗ヲ
持續シアリ　右翼隊ハ現在ノ戰線ヲ整理
シ　爾後ノ攻撃ヲ準備セントス
二、第一大隊（第三・四中隊欠）ハ一部ヲ現在
ノ第一線ニ殘置シ　主力ハ青浦東門東方
約四〇〇米クリークノ線ニ集結シ　前面
ノ敵情ヲ捜索スルト共ニ爾後ノ攻撃ヲ準
備セントス
三、第一線ハ所要ノ工事ヲ行フベシ
四、七ノ警戒捜索地境ハ自動車道
五、給養ハ現地物資ニ依ルベシ
六、余ハ青浦東門東方四〇〇米無名部落ニ在
リ
七、第一第二中隊ヨリ約一小隊ノ兵力ヲ現在
ノ第一線ニ殘置シ特ニ前面ノ敵情地形ヲ
捜索スベシ

地形　クリークノ深サ　幅　通過点　城
壁ノ高サ　敵が夜間退却セザルヤ等

尚死傷者は中隊に於て收容せよとの事でした　中隊は第三小隊を第一線に殘置して警戒させ　主力は死傷者を收容して逐次後方に移動し　二四〇〇青浦城東南　無名部落に集結して　中隊に復帰された第一小隊をして負傷者の後送及戰死者の火葬をさせ　約半數を以て晝間卸した背嚢を運ばせにやりました
そして第三小隊に器具を渡すやうに区署しました

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

背嚢を後方に置いて来たので夕食も喰はず
城壁を攻撃するのに器具も持たず　夜間と
は云へ全く曝露して城壁に迫り　掩体を構
築することも出来ず　精神上非常に苦痛を
感じた訳です
給養は現地物資を利用せよとの命令であつ
たが　夜半焼跡の部落に集結した中隊は何
も利用するものは手に入らなかつた
將兵一同食ふよりも賬があれば一膳でもし
たいばかりでした
第三小隊に器具を送り届けたのは十一月十
一日〇二〇〇だつた　〇三二〇河野下士官
斥候より　城内の敵兵は退却の徴候がある
旨の報告があつたので　直に大隊長に報告
して城壁奪取の爲の諸準備をしました
すると大隊本部の某軍曹が兵一名をつれて
中隊の位置に来て更に　少し前進したかと
思ふと直に引返して来た

其の時は大隊長も既に中隊の位置まで前進
されてゐたが　其の下士官が
「敵は退却してゐない　今の報告は嘘だ」
と　大隊長に報告した　そこで大隊長殿は
「もつとよく捜索せよ」と大層叱つて　プ
ン〳〵して引返された
そこで竹原少尉に一ケ分隊を以つて城壁東
南角附近の敵情を捜索し　好機に乗じ同城
壁を占領するやう命じて　梯子を携行させ
て〇四〇〇出発させ　小代曹長以下五名に
本道に沿ひ前進して　東門附近の敵情を捜
索し好機に乗じ東門を占領せよと命じて
〇四〇五に出発させました

両斥候に電燈による記号を

示し且遮傳を配置した　晝間攻撃以來多数
の死傷者を出し　連日の戰斗で私も少し興
奮してゐました

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

且中隊の報告に誤があつたとすれば誠に申訳ないことだ　と責任を感じて　どうせ第一線中隊として青浦城を攻撃せねばならぬのだ　此以上犠牲者は出したくない　何とかして黎明までに城壁を占領させて貰いたいと神に祈りました

竹原將校斥候は城壁東南角のクリークに潜進して敵情を窺つた　すると一般の舟が通りかゝつた　不意に堤防上より飛び出し之を鹵獲して敵兵五名を刺殺した

敵は城壁上より射撃したが　金武一等兵の敏捷なる操舟によつて全員無事対岸に渡つた　綾部上等兵は上陸と共に梯子を城壁に立てかけ　吉田伍長を先頭に城壁を攀登り〇五・〇〇占領しました

又小代斥候は本道を前進して東門外道路上で砲を有する敵数名を刺殺し　砲及馬五頭を鹵獲し　次で東門外クリークの線に前進し　舟三度によつて南方から前進して來る敵を発見　之に急射撃を浴せて撃退した

東門外橋は焼き落されてあつたので　岸に繋留してあつた地方舟を利用して機を失せず渡河して　城壁破壊口から攀登つて〇五・〇〇に東門を占領した

東南角及東門より同時に電燈を円く振つて占領を報告した　河野伍長よりも

「竹原將校斥候は城壁を攀登しつゝある」

との報告が來ました

今か〳〵と待ち構へてゐた私は直に湯浅准尉をして両斥候の成功及中隊独断攻撃前進の件を報告させ　中隊は東南角に向つて急進しました　竹原將校斥候は城壁占領後敵の逆襲を受けたはれども撃先を制して射撃し　且格斗して之を撃退した　綾部上等兵は一人対二人の格斗をやつて見事敵をやつゝけた

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

中隊主力がクリークまで前進すると 東門と東南角中間の城壁上がチエツリの集中射を受けた 私は「仕舞つた」と思つたけれ共 もう一刻も躊躇すべきではない 速かに渡河して城壁を占領しようと決心し 直に軽機四銃で堤防を利用して掩護射撃をさせ 小銃手は竹原斥候の利用した舟に乗つて渡河を決行し 一本の梯子によつて城壁を攀登し 竹原小隊の戦果を拡張し 〇七四〇中隊全員城壁に登り 東門より東南角に亘る間を完全に占領した

次いで第一小隊は城内を掃蕩して西門を占領し 第二小隊の一部を以て東南角より東門南方無名部落に亘る間を占領させ 其の一部を以て城内を掃蕩させ 第三小隊は東門内に集結させました

大隊本部及聯隊本部は東門より入城し城頭高く日章旗を翻し 軍旗を奉じ東方に面し

万歳を三唱した時は 感慨無量で思はず涙をこぼしました

中隊は此の城壁攻撃に対して軽傷兵一名を出したのみであつた事は 全く天祐神助であつたと感謝する外はありませんでした

此の戦斗で特に感じた事は平時前進時機の看破の教育を深刻にして置く必要があると思つた事です 兵は銃声を聞くと直ぐ停る 銃声を聞いた後に停つても弾は通つた後で 敵の射撃の方法を良く知つて 射撃の終りさうな時に発進すれば 弾は何時もこちらが地物を利用してゐる時に上を通るのです 又弾下に於ける迅速なる掩体構築は必要である 従つて如何なる場合でも器具を携行せねばいけない 特に城壁を攻撃する時に器具を持たぬ事は絶対にいけない 指揮官として注意すべきことであると痛感しました

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

尚敵情地形は各指揮官の位置や判断によつて異るものであるから 自己の位置より見たる敵情地形を以て他を率する事は 應々にして誤があるものだと感じました

肉彈の勇戦

歩四七ノ二
歩兵上等兵　安東恒記

北支中支の数多い戰斗の中でも 青浦城の攻撃は砲の援護もなく 唯一肉彈を以て数倍の敵に打つかつたのですから 今思ひ出しても身の引き緊る様な感がいたします それは十一月十日のことでありました 軍旗中隊であつた我中隊は第四中隊と交代して 第一線となり徐家浜を攻撃する事になりました

激しい敵銃砲火の中を 中隊長殿の「前へツ」の号令一下 一同猛子の様に彈の中を駈出しました

敵はこの新しい目標を発見して無茶苦茶に射ちます

稲田や立稲に弾丸する彈は全で夕立の様です 停つても彈が来る 駈けても彈は追付いて来る

然も刈り遅れた稲は足にからみ付いて思ふ様に駈けられません もう中るかもう中るかと思ひつゝ一気に駈けて やつとの事で部落から四五百米前方にある小さな堆土に辿り着きホツとして後を振り返りますと戰友は夢中で駈けて来ます バタリ倒れる やられたなと思つてゐると 又起き上つて飛込んで来ます

徐家浜の部落には敵が盛んに動いてゐる

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

全部の家屋に銃眼があつて　其處から私達を狙つておるらしく　どこでも彈着が良いのです

中隊配備の重機関銃が推土の蔭から盛んに掩護射撃をして呉れます　発煙班が飛び出して　白い煙がむく〳〵と稲田の中から浮び上りました

中隊長殿の「前へ」の号令で　私達は彈かれた様に又推土から飛び出し　稲束から稲束へ畔から畔へと　一本の草も利用しつゝ前進しました

「やられた」と叫ぶ声に振り向くと　藤原寄が倒れて居ます　而も傷き倒れた彼が　私達の為に煙幕構成　最後の発煙をして呉れた

吉岡が駆け寄つて止血をやつてゐるらしい　声と叫び銃声の為に少しも判らない

私達は唯もう「戰友の仇だ」とばかり無我夢中で敵陣に突入しました

村落を焼くもう〳〵たる煙に包まれて逃げる敵を軽機関銃を腰にかまへたまゝ射つて〳〵射ちまくりました

須川は彈の來る中に眞裸となり「クリーク」の中に飛込み後で急造の橋を作つて呉れました

私達はそれを渡つて青浦城に向つて攻撃前進しましたが　眞夜中まで攻撃してもなか〳〵陷ちませんでした

翌十一日午前五時　やつと竹原　小代両中隊の決死の突入によつて占領する事が出來　中隊は中支上陸早々青浦城一番乗りの凱歌を上げる事が出來ました

長谷川聯隊長殿以下城壁に登り東天を拜して万歳を絶叫した時は戰友一同男泣きに泣いてゐました

肉彈で戰い取つた青浦城　多くの戰友を犠牲とした青浦城　一生忘れられない戰斗です

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

何んという豪膽不敵

歩四七ノ二　歩兵軍曹　秋吉秀行

時は十二年十一月十日
所は青浦縣城攻撃の最中徐家浜前方約百五十米
連日の悪路を急進の為め部隊は一門とて来ておりません
敵も仲々頑強です　堅固な陣地に據つて一歩も退きません
当時自分はまだ上等兵で擲弾筒手として敵に敵陣に猛射を浴せておりましたが遂に弾丸が無くなりました
小隊長殿は
「擲弾筒来て〜」
と大聲に叫ばれます　自分も
「弾丸！　弾丸！」
と叫びますが後方との連絡がつきません

敵前百五十　弾丸は雨の様に飛んで来ます　一寸でも頭を上げればやられます
其の時突如
「上等兵殿　須川が弾丸を取つて来ます」
「おい　この弾丸の来るのに出前行くのか」
と言へば
「いえ　任務です　弾薬手の使命です」
と言葉も終らない内に不敵にも笑ひて後方へと行きます　自分は彼の無事を祈つて喉筒を擦でゝおりました
所がどうでせう　約て二十分後には擲弾二十発を携行して帰つて来たではありません　か　貴重な弾丸です　神に祈りつゝ物凄い射撃を敢行しました　敵陣に炸裂する擲弾は須川一等兵の責任感と不敵の態度を其の儘に實に小気味よく命中します
斯くて中隊長殿を先頭に敵陣地に突出しましたが須川一等兵の持つて来た擲弾が大いに役立つたことは勿論であります

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

其後更に敵弾下で裸体となりクリークを泳ぎ渡って筏を取って帰り假橋を架けて中隊全員の渡河に貢献しましたが 同一等兵の責任感の旺盛さと豪膽不敵さには全く自分達は敬服しました

竹原決死斥候 ……

歩四七ノ二 歩兵上等兵 松田正樹

十一日午前四時竹原少尉殿を長とする我々一ケ分隊の決死隊は黙々として青浦城に迫って行きます

無事西米子前迄前進しました 城壁の十米手前には中三十米位のクリークがあります そっと其の前に伏せました

その時頭上にプロペラの音が聞え出しました 勿論自分等には（敵機だ）と思ひました 飛行機は城頭に照明弾を落しました その光で敵状を仔細に観察します

すると此のクリークに上流から民船が一艘流れて来ました

「スハッ」と飛込んで乗って来る敵兵を五六名刺殺りに上げました 城壁には黙々として歩哨が立っているのが見えます

「今だッ」と素早く舟を乗取って向岸に渡ります

夜闇を利用して動作は機敏です 城壁に梯子を掛けましたそれを綾部上等兵計伍長殿・小隊長殿と次々に登ります 途端之を発見した敵が逆襲をして来ましたが機先を制して之を撃退しました

早くも傳令の報告に依り中隊主力はクリークを渡らんとしております その頃は既に明け方で東に薄赤い地平線を描ておりました

「小隊長殿 中隊は来ました」

「さうか」 決死隊の一同は（しめた）と互に心の中で思ひました

其時東門の方向で頻りに銃声がし始めました 多分小代斥候が戦っているのでせう

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

歩四七ノ二　上等兵　佐藤幸三

徐家浜の部落を占領した私共は　燒殘りの壁をたてに身を寄せて　拂曉の攻撃を待つことになりました　然し背嚢は後方に殘して來ましたし　何も喰べる物はなく　寒さは寒く　敵彈は引きりなしに飛んで來て假寢さえも出來ませんでした

朝方の三時頃だつたと思ひます　小代曹長殿が沢死斥候として出られる事になり　私もその一員として同行する事になりました

任務は青浦城東門外の敵情偵察と東門占領です　思ひだけが躍ります　然し決死の覺悟です　長次下五名です

闇の中に諸準備を整へ　身軽ないでたちで靴音もしのばせつゝ闇の中を本道に沿つて進みました　或は伏せ　或は停止して　敵情を窺ひながら余程前進した頃　行く手にかすかに火煙の上るのを認めました　その火煙にすかして見ると　敵の哨兵五六人の人影が動いてゐます

「よし敵だ　やつゝけるぞ」　と云ふ斥候長の力強い命令で　一同息を呑んで　ジリ〳〵と肉迫して　咄嗟に突入　驚く敵を一人も殘さずやつゝけました　此處は敵の砲兵陣地でした

具合良く行つたと勇気百倍　少し進むとクリークです　所が今の物音に気附いたのか敵は船でどん〳〵此方へやつて來る　発見されては此れ迄と一斉に之に向つて猛射を浴せますと　三四隻の船は忽ち敗走しました

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

ぐず〳〵して居られぬぞと言ふので下手に下つて見ますと一隻船がありますが岸から三米位離れて居ます

山下が竹を拾つて来て幅跳の要領で向岸に跳びました　私は竹が途中から折れて濠鼠になつて仕舞ひました　船を利用して全員無事にクリークを渡り城壁下にたどり着く事が出来ました

梯子を利用し破壊口から登りましたが　その時の気持は不安と悦びとで半々でした

六名無事城壁に登つた時　東南の一角から猛射撃を受けました　私は右側腹に強い衝動を受けましたので　不覚にも「やられたッ」と思はず叫びましたが　後で見ると不思議にも擦り傷もありませんでした　城壁占領の合図と共に中隊は潮の如く押し寄せて　昨日来頑強に抵抗した敵も蜘蛛の子を散らすが如く敗走したのでした

敵傷兵に施薬

歩四七ノ二　伍長　須川作次郎

敵の大軍は我が軍の為に完全に粉砕されました　見れば幾十となく敵の死体が轉つ居ます　中にはまだ虫の息で呻つて居る者さへ居ます　此れを見られた隊長が

「苦しいか　今薬をやるぞ」と

何かやられます　一兵士は目を開けて

「冷水　冷水」と　かすれた声で哀願しました　誰かゞ水を飲ませてやりますと　両手を合せ涙をたゝえ

「謝　謝」と伏し拝みました

これは青浦城陥落直後の話ですが　今迄に我中隊では幾十人となく　敵兵を救ひ

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

郷里に帰してやりました
その中には中隊の為に骨身を惜しまず 弾丸下も物ともせず 実に勇敢に良く働いた者も沢山あります
そして彼等が故郷に送り帰へされる時は別れを惜んで泣いて別れるのでした
謝々と別れを惜しむ 村はづれ

青浦城望みつゝ
無念の一夜

歩四七ノ一一 軍曹 向 豊

昭和十二年十一月十日 我が第三大隊第十一中隊(当時中隊長時松中尉殿)は右第一線として青浦城攻撃の命を受け 敵弾雨飛の中を物ともせず 右前方に青浦城の城壁を望みつゝ前進しました
迫撃砲弾が盛んに落ちますが 不発弾も相当にある 上海方面から退却する敵は續々と黒山の様になって移動して来ます
前面の家屋からはケエツコが猛烈に射ちますので前進は非常に困難です 然かも前進する所は深田で此れ又思小様に歩けません
敵の姿が見えます それ距離六〇〇あれを射て と我分隊は敵に猛射を浴せてゐましたが 所々な所で軽機に故障が出来ました
残念で〳〵仕様がない 心はせく せけば尚更故障排除が出来ない 全部分解して見ると抽筒子が折損して活塞が後退しない
軽機を握ってたゝくやら色々と工面してやっと故障排除が終った時の嬉しさ 敵は此れ様な思いがしました
然し小隊主力は已に遠くと前進してゐます 遅れてはならぬと前進 墓場の所に停止し

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

た時は　射手塗間上等兵共に僅か三名しか
居りません
此れが愈〻最後かも知れぬぞ〻と三人で固
く手を握り交し　水筒の水を分け合つて飲
みました
やつと小隊に到着しようとした時です　私
の直ぐ後を走つて居た稲葉一等兵が敵弾に
バツタリ倒れた　「天皇ーーー」　と云つたが
後は続きません
「稲葉〻〻」と呼べど　早や口をきいては
呉れません　屍に取りすがり傷口を見れば
頸動脈を貫通して血が吹き出してゐます
日頃から無口で勇敢だつた稲葉は愛機を抱
いた儘　永久の別れとなつたのです
敵の集中射撃は一段と激しくなつて來ます
此の時戦友斃るると見るや　宮崎一等兵は一
散に駈け寄り

「危いし」と云ふのはたまず　稲葉の手から
軽機を引たくる様に取ると　それを背負つ
て土堤の線まで脱兎の如く駆け出しました
が　土堤に今一歩と云ふ所で　無念敵弾は
宮崎の頭部を貫通し　軽機を負つたまゝ二
回轉げて水田の中に斃れました　然し軽機
を高く差上げて居る　何と云ふ愛護心の強
い兵かと思はず涙が湧いて來ました
残り少ない分隊から己に戰死一　負傷三が
出てゐます　敵は益〻兵力を増し　進むに
進まれません　膝から下を水田の中に浸し
つゝ重傷に苦しむ宮崎を介抱してゐました
大時頃だつたと思ひます　宮崎が苦しい息
か　ウンと云つて頭を急に上げました
其の時又バラ〳〵と弾が飛んで來ました
私の頭にもガンと來ましたが　それはかす
傷でした　宮崎がガクンと頭を下げました
ので　しまつた　と思つて見ると　此度は

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

目を貫通されて居ます　泣いても泣きゝれぬ感じです

宮崎が又やられた　と私が誰に云ふともなくつぶやきますと　死んだと思ふた宮崎が

「宮崎か　宮崎は未だ生きて居るぞ」と

云ふのです　其の時のあの悲痛な声は一生忘れる事は出來ません

人一倍精神力の強烈な彼は　不思議と九死に一生を得て内地還送の後は　手厚い看護で先目丈けは見える様になつたとの便りに接し　有難涙に暮れた事があります

初て　さしも頑強な敵も我猛攻に耐へかねて漸時退却を始めました　我分隊の残員は私が稲葉を背負ふ　他の者が宮崎以下の負傷者を背負つて　暗い所を苦心し乍ら千米前方の部落に向ひましたが　其の途中背中で痛い〈と訴へる負傷者を　敵が近いから声を出すなと　叱り打つべの切なさつらさは　身を切られる以上の思ひが致しました

部落に入つて見ると敵の陣地は実に立派なものでした　中隊との連絡も未だとれませんが　一と先此處で負傷者の手當をと　一息ついた時　白虎隊最後の飯盛山の光景も斯くやあらんと思はれて　思はず伍藤伍長と手を取り合つて男泣きに泣きました

湯を沸しては負傷者を拭いてやり　飯が出來たと云つては先稲葉の屍に供へ　顔のハンカチを取つては

「稲葉　飯だよ」と云ふ戰友達のべ盞しは肉身以上　側で見て居て胸がこみ上げて參りました

やはり此の日飛行機の通信筒を取りに行つた小川伍長も戰死して　通信筒を持つたまゝ倒れて居たとの事でした

無念にも悲しき一夜を此の部落で徹し　翌

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

けを待つて今はとき稻藁の白木の箱を背負ふ　青浦城に入り更に一路南京攻略へと前進致しました

敵前で負傷

歩四七 III

歩兵伍長　釘宮　保

十一月十日早くも松江を経て青浦城東南方約三粁の地点に進出した　我長谷川部隊は其の夜の中に裝備を整へ　約四時間グツスリと眠入りました

一夜明けて十一日　起きて見れば連日の雨は何処へやらからりと晴れてゐました　我等は早く出発準備を完了して　今は隊長の命令を待つてゐました

命令が傳り　やがて中隊長殿の口から　大い声がし

「前進！前進！前進！」の号令と共に各小隊にも各々　後藤が云渡され　一同躍雀乱舞さした

「左に働く時が来たぞ」と口々に

くで本道の右側の田圃に入り小下に攻撃前進を開始しましたが

やや敵は猛烈にケエツコ　小銃と限りの銃火を我等に浴せかけます

「何に　ケヤンコロの弾が當るか」とばかり前進して一名の負傷者もなく　早くも一部落を占領しました

然し此の部落を占領するや　敵は益々頑強に抵抗し始めました　我軍には連日の雨の為砲が一門も到着してゐなかつた関係もありませう

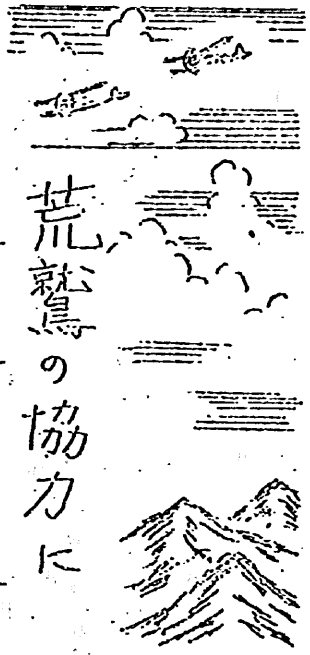
友軍が突撃する迄は退却しないと云ふ有様

0287

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

でした
我小隊は尚も前の部落を攻撃する為 各個
前進にて移動を始めました 其の時敵は又
も猛射を開始し突如左側方より ケエツコ
銃を以て我小隊を狙撃する 敵彈は殘念に
も私の左腕を貫通しました
「あゝしまつた 憎らしき ケヤンコロ奴」
と 思つたが其の時は既に左腕は鮮血に染
り 腕は次第に痺れて來るばかりでした
其の時戰友が駆け付け止血の手当をしてく
れ 其れから間もなく衛生兵の手当を受け
山口一等兵が手傳つて裝具を解き 支那民
家にて夕方迄休んでゐましたが 中隊の戰
友は尚も交戰中でありました
此の戰斗に於て夕方迄に戰死傷者が多數出
ましたが 戰死の勇士は明けて十二日中隊
長殿外數名の者に送られつゝ其 部
又淋しく火葬され 負傷者 [illegible]
[illegible]

容されたのでありました
私共は活躍された無言の英靈諸勇士に心か
ら御礼を云ひ 冥福を祈りつゝ 涙と共に
域内野戰病院に收容される身となつたので
ありました



荒鷲の協力に 前進又前進

歩四七 皿れ/二
歩兵上等兵 渡辺利治

十一月十一日午前九時頃目指す青浦城ニ
料の地点迄進出して來ました
八は我々の数倍も居るらしい 中隊は直に散

0288

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

間に移り　道路を挟んで[illegible]
線に　遮蔽物とてない稻田泥田の[illegible]
又躍進
早や衛生兵を呼ぶ声が聞へます[illegible]
に　畜生ッ　チャンコロ　今に見[illegible]
がむらく湧いて來ました
敵は多勢を頼みに盛に猛射を浴せます
残念にも急追撃に道なき泥濘の中にて　頼
む砲も未だ追及してゐません
敵は愈に増長して文字通りの乱射乱撃です
第一中隊が左に増加しましたが　多くは敵
弾に倒れました　刻一刻と時間は過ぎてク
リーク泥田に伏した儘前進出來ません
腹の虫は容赦なく空腹を訴へるが弾雨の中
食事も許されず　城壁を目前に控へ乍ら日
は傾きかけてゐます　今は唯　肉弾あるの
みだ
此の時神の助けか　爆音高く海の荒鷲は我

が上空　[illegible]機と飛來し悠然と旋回し始
めました
[illegible]が戰友と固[illegible]を握り[illegible]
[illegible]と言葉が出ました
敵はパ[illegible]リと射撃を止め　頼む荒鷲は愈
低く降[illegible]見　第一弾は見事命中　前方
滝蓋は見事粉砕土煙は空高く上る
第二弾第三弾と敵は愈〻狼狽し退却を始め
ました
此の時　[illegible]かり一斉射撃の命は下りました
戰意を失い逃げ惑ふ敵を射撃しては前進に
追撃　銃を捨て、逃げる奴　全く痛快です
ふと気が付けば城壁迄　四五百米に迫つて
今度は尚一層激しい狙撃を受けました　敵
も死物狂いです
先頭に前進してゐた戰友二名は無念にも又
負傷し　増〻気は立つばかりです
夕闇も迫り辺りは暗く　又も前進困難に陥

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

りましたので一時道路に遠ざかり　飛弾のうすらぎを待つて戰友と後方に涙を呑んで退りました

午前零時再び令令を受けて　星明りを頼みに死体を越え前進しましたが　道路には自動車の残骸や弾薬兵器　又炊事道具等が一面足の踏場もなく散乱してゐました

漸く元の所に來て道路を利用して壕を堀りました

今夜は此所で警戒に就くらしい　壕も大方出來て不ツト一息入れる間もなく　中隊より命令が來て　小隊は將校斥候となり城内の敵情並に進路の偵察命令を受けました

小隊長殿を中心に夜闇を更に前進　一進一止城門に迫りました　又橋梁に出ました

靜さを破つて舟の櫂の音がギイ〳〵と気味惡く聞えます　皆緊張してゐます　士　が避難してゐるらしい

更に前進　漸く北門と目星しき箇所に來ました　敵は夜に乘じ退却したらしいが城門には尚十数名の敵が頑張つてゐるらしい

幸に橋は落されて居りません

東の空は次第に明るくなつて來ました

うめき声に土民の家を覗けば敵の負傷兵が百名余り收容されて　手当も十分に出來てゐないで全で地獄絵巻の様でした

今は一秒を爭ふ時　小隊長以下一拳に橋梁を渡り円弾にて城門に迫りました

敵は此の意気に恐れて数発の手榴弾を方向違いに投げ　何の損害もなく城門に入る事が出來ました

逃げる敵を突殺しつゝ北門高く日の丸を揚げ　それより憩ふ暇もなく一路崑山へと追撃に移りました

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp